
銀河迷雄伝説

浜フィル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河迷雄伝説

【Nコード】

N0169Y

【作者名】

浜ファイル

【あらすじ】

日本人初のプロバスケットボールNBAのドラフトを待つばかりの大学生の俺はもうすぐ金、名声、女、何でもかんでも手に入る予定だった！しかし気がつけば転生してあの銀河英雄伝説の世界に入り込んでしまった。しかもあの超KY貴族の次男として！どうなるのよ！俺！・・・この話はらいとすたっふ2004るーるを遵守しております。また、多くの方々の二次小説を参考にさせていただいております。温かい目で見守っていただけると幸いです。初執筆なので色々教えていただけるとうれしいです。

第一話：プロローグ

第一話：プロローグ

パアーン！！

耳を劈く大音量の電子ホーンが試合の終わりを告げた。

それでもここマジソンスクエアガーデンの観客の声援に最後まで聞き取れなかった。

ゲーム終了。俺達は負けたんだ・・・

NCAA全米大学バスケットボール選手権決勝戦【ザ・ファイナル】だった。

コネチカット大学 対 デューク大学 8点差で俺達デューク大学は負けた・・・俺の大学生活最後の試合は幕を閉じた。スタッツは21得点11アシスト10リバウンドこれは【トリプル・ダブル】というやつだ。

俺の名前は速水純一20歳。身長196?で体重88?の日本人だがバスケットボールの夢をつかみにアメリカの大学に進学した。目的はもちろん大学バスケットで活躍して頂点であるプロバスケットのNBAに行くことだ。激しい生存競争の中、ついに念願のプロバスケットのドラフト候補として名前が広まり騒がれた。しかもただのドラフト候補じゃないぜ、一巡目指名つていうトップ中のトップの扱いだ。

現在はデューク大学の3年生だが、アーリーエントリーという勉強嫌いな奴には魅力的な制度があるので今年のドラフトで指名を受けられるわけだ。

金、名声、ありとあらゆる賞賛が俺の周りを跳ね回っている。これからの俺の人生は変わる。俺が自分で勝ち取ったんだ。俺が勝者なんだ。これからはプロバスケットボールの世界でも申し上がったやるぜ。今だってみんなには悪いが金も女も不自由なんかしたことは無いぜ。しょっちゅうパーティーやって、イカすギャルをそれこそとつかえひつかえだ。

今日もさっさとホテルの戻って楽しむつもりだ。ドラフト会議は1ヶ月後だからそれまではどのみち練習もできないし、それまではのんびりだな。ロングバケーションにして南のリゾートにでも行つて来るか。なにしろこれから暫くは自由の身だから。

ホテルに戻った俺は軽くシャワーを浴びて、イカすギャルを呼ぶ前に軽くチームメイトからもらったドラッグを決めとくことにした。

副作用は無く常習性もなく、ドーピングチェックにも引つかからない。便利なヤクだよなこのモーニングスターってヤクは・・・何だか少し眠くなってきた。ちょっと、サクッと寝とくか、その後は激しく楽しいラウンドが待っているわけだからさ・・・ぐう、ぐう、

・
・

「おお！お生まれになったぞ！」「やった！男の子だ！帝国万歳！」
「本当か！余に弟ができたのか！」・・・な、なんだ・・・周りがうるせえ！静かにしやがれ！俺が眠ってたぞ！まだ眠いのに！さげんな！「おお！おお！元気な泣き声だ」・・・何？俺の声が鳴き声？何言ってるやがる！うるせえんだよ！この俺に何か文句でもあるのか！あれ？おかしいな？体が何だか思っように動かないぜ！どうなってるんだこりゃ？

頭が混乱してたが、落ち着いて周りを見ると・・・何だか変な服着たやつらが大勢いて、何だこいつら？お前ら何なんだよ！つてよく聞けば俺の言葉は・・・言葉じゃねえ！どうなっちまったんだ俺？誰か助けてくれ、警備員をよこせ！あれ、やっぱ言葉にならないじやんか！泣き声だ！何でしゃべれないんだ！どうなつてんだ？ここはどこだ？誰なんだお前らは！何？ランズベルク家？何のことだ？待てよ・・・ランズベルク家つて・・・あのランズベルク家かよ、あの銀河英雄伝説に出てくるあのランズベルク家なのかよ！

落ち着け、落ち着けこの俺ともあるうものが・・・よくよく見てみると大分わかってきた。理由はわからない。誰の仕業かもわからないが、どうやらここは銀河帝国の貴族のひとつであるランズベルク家であり、俺は次男として生まれてきたらしい・・・銀河帝国つてあの銀河英雄伝説に出てくるあの銀河帝国だぜ！しかもよお、俺の長男はあの！ノー天気男のアルフレッドだぜ！？

アルフレッド・フォン・ランズベルク

有益ではないが、害のない無邪気な人物。かつては貴族のサロンで害のない詩などを書き散らしていた。エルウィン・ヨーゼフ誘拐に関わってからは、かせにその忠誠と情熱を捧げたが、報われることなく終わったようである・・・とウィキペディアには書いてある！

どうやら俺は転生して銀河英雄伝説の話の中に来てしまったみたいだ。だが、そもそも俺は原作をノベルズ、文庫と買いなおし、限定DVDBOXを持っているほどの銀英伝フリークでもあるので、何か複雑な感覚である・・・

ちよつと待つてくれ。そんじゃあ、俺の金は？女は？夢なら覚めてくれ！やっぱスーパースターの俺がいい！誰か助けてくれえ！しかも赤ん坊で生まれたのでみんなが気持ち悪い笑顔で顔を摺り寄せて

きやがる！やめろ！気持ち悪いんだよ！おまけにあの馬鹿兄アルフレッドは「余もこれからは弟に恥ずべき事の無いように気持ちも新たに帝国文学の探求を進めるつもりだ」もう、しぬれ！「貴族の尊さと偉大さを弟に教えていかなければ」とか、何だか与太話が聞こえてきたぞ！寒気がする！ガクガク！ブルブル！

何日か何週間か経ち、最近は、「まあ、いつかは戻れんべ」というか暢気と言つか、所詮はランズベルク家は大貴族なわけで食うに困らないのである。それにしてもそれなりの待遇で生きてきた俺から見ても「スゲエ！」「何考えてんだ？」って感じの生活というか毎日がお祭りみたいなもんで、毎週の木金土日は自宅庭園でパーティーだぜ？中には結構かわいい顔した貴族のお坊ちやま、お嬢ちやまが紛れ込んでるので、それなりに赤ん坊をやっていても色々構って貰えるので楽しい。暫くの間はこんな現実離れた生活に身を置くのもいいかも、って感じてる。

そのまま戻れないまま、貴族として俺は8歳になった・・・無能だが領民には極めて温厚な市政を行っている父親とこれまた極め付きの世間知らずだが善人の母に育てられてきた。兄のアルフレッドの馬鹿っぷりは相変わらずで、正直何を考えているのかはわからない。貴族幼年学校では上級生なのに後輩からいじめに合っているようなので、こっちはストリートファイトで慣らしたバトルで何度か救ってやったりした。その度に「兄に対するその配慮、感極まる」「これからも兄弟二人手を取り合って共に進もうではないか」・・・って弱いのはお前だけだろ？

幼年学校に入学した俺は、ミニフライングボールチームに所属した。もともと居た俺の世界ではミニバスケットボールみたいなやつね。重力を軽く設定した空間でハンドボールとバスケットボールの間

みたいなルールで行われるスポーツである。まあ、何と云うかプロバスケットのドラフト候補だった俺はこの程度のスポーツは片手間だよ。敵無しだよ。一瞬でチームのエースだし、地区の選抜選手にもなってしまった。大人のフライングボールでも見たこと無いようなスカイプレーを連発する俺は幼年学校の、ランズベルク家の誇りだった。ちなみに馬鹿兄のアルフレッドは運動神経マイナス100億光年！位の駄目さだった。試合が終わるといつも「よくぞ！これこそ我々兄弟の誇るべき手柄である」ってさあ・・・ほんとに頭悪いだろ！かなりの酷いレベルで！

頭脳明晰、運動神経抜群ともなれば当然校内のスターになるのは簡単だった。ただし一学年上に金髪&赤毛のスーパーコンビがいたので、よく比較はされたけど。金髪の方はリアル！ラインハルトフオンミューゼルだった。マジかつけー！「君が最近噂されているスーパーボーイなのか？」「兄上の方は何だかよくわからないが大したものだ」「貴族の中にもまだまだ凄い人物はいるんだな」と先輩風びゅーびゅー吹かせて去っていった。

それ以降は妙に気が合うのか、別の思惑があるのか、三人で結構遊んだりした。パツキンラインハルトのお姉さんにも何度が合った。生アンネローゼは気が狂うほどの美女だった。こりゃ皇帝も欲しがるわな・・・ホットチョコレートはとても美味かった！さすがに「アルフォンス、弟と仲良くしてあげてね・・・」とは言われなかったけど。ラインハルトの方は時折、試すかのようにドキリ！とする話をしてくる。その時の隣で聞いているキルヒアイスの顔は尋常ではなかったが。しかし「ルドルフにできて余にできないとは思わない」的な話は原作通りで感動していると「どうした！アルフォンス、臆したか・・・説明しなかったが俺の名前はアルフォンスという。アルフォンス・フォン・ランズベルクだ！どうだい？馬鹿兄よりは頭良さそうだろ？」

最初の転機は訪れた。クロプシュトゥク家領内で発生した大規模暴動に端を発し、周辺星域領内で暴動が拡大した時期があった。当然近隣に位置しているランズベルク家にも暴動が起きかけた。何しろ父親は領主でありながら無能でお人よしときているので、暴動の鎮圧どころではなかった。当然鎮圧部隊の指揮は馬鹿兄のアルフレッドが当たったが・・・わかるよね。火にニトログリセリンいやいや、火にゼツフル粒子なくらいに暴動が激しく広がってしまった。

（仕方ねえな。こう見えてもデューク大学経営学部出身だし、将来は起業も考えていたし、少し助けてやるか・・・）

ということ、暴動の原因は何かということ調査したのである。もとのクロプシュトゥク家の暴動は不公正な裁判が原因のものであったが、ここランズベルク領ではそんな原因は無く、日々の不満が爆発した・・・そんな感じの調査結果だった。なーんだ、それならば領地政策を抜本的に見直せば済むことじゃないか、ということとを父親と馬鹿兄のアルフレッドに説明した。

内容はこうである。現在のランズベルク領内の租税割合は6割ランズベルク家で4割を領民の取分とする分配方式である。しかもその中から各種税金を追加で徴収している状態である。この部分を大幅に変更するのだ。4割をランズベルク家、6割を領民の取分とする。しかも徴収した4割の半分をランズベルク家の収入とし、残る半分を全部領民の福利厚生に充てることにした・・・ね！大きな改革でしょう？しかも福利厚生を医療と教育の充実に大きく割り振ったのである。人はパンのみに生きるにあらず！

父親も馬鹿兄も猛反対だったが、10のうちの取分を6割から4割に減少するという発案がそもそもお馬鹿なのであって、今後は10

0のうちの40を手に入れるための政策を行うべきであると主張した。そんな話は聞いた事が無いとか、前例が無いとか渋っていたが、誰もやっていないからこそ我がランズベルク家が真つ先に手を付けるんだ！そこにこそ意義があるんだ！説得し、実行した。ここで俺の経営戦略部分でもアドバンテージを稼いでおくことがランズベルク家1000年の計であると説明したのが効いたみたい。

馬鹿兄アルフレッドはまたも「感動した！弟の知力は一箇艦隊にも及ぶ」・・・あれ、その話もどつかで聞いた気が・・・

領民の反応を知りたい？

決まってるでしょ？大喜びですよ。みんな笑顔でファイヤードダンスしまつくていたし・・・領土を守るための私兵についても今回は整備した。近代化を一気に推し進めて人員を大幅に削減した。その結果は労働人口の増加になり租税の金額ベースではそれほど大きい減収とはならず済んだ。これからは領民も領主もいっしょにハッピーにならないとね。しかもどういわけかランズベルク領内は希金属（レアメタル、レアアース）が豊富に産出できるので。携帯電話ハイパーウェイブ話や長距離高速通信の機械には必須の原料なので取引価格が安定して流通できているのである。

ここで少し銀河帝国の携帯電話の事情を説明しよう。現在はネオ・ノキアスという会社がトップシェアである。次いでマリクソン社が追う。離れて大華通信公司、IT & amp; KDDI、とかが続いている。この殆どがランズベルク家の希金属を使っているのである。どこかの国のように、ここで一発生産量を引き締めちゃうか？

知れば知るほどにこのランズベルク家の経済環境は超一流の土壌だったのである。一応経済顧問はいるが、コトラーやポーターの戦略論すら読んでいないらしい。それなら近いうちに俺が自ら回してい

くか・・・ちなみに資産運用は株式や金、債券などの現物投資ではなく、幅広く株式、債券、金、先物デリバティブ、投信などをバランスで集めたCDSクレジットデフォルトスワップで運用している。ヘッジを高く設定しているため、大きく利益は出ないが、致命的な損失もカバーできるので無能な・・・いえいえ多忙なランズベルク家の方々には一番ですよ、と資産運用会社の担当から言われているみたい。やっぱり馬鹿貴族だね。

貴族のランクで考えるとランズベルク家はBランクの規模なんだけど（ちなみにSランクは例のブラウンシュバイク家やリッツテンハイム家を筆頭に5〜6家）Aランクは惑星を3つくらい所有している貴族達で総資産は数十兆帝国マルクを所持しているといわれている。あま、世紀末の東アジアの島国くらいの規模だと思えばいいかも・・・この規模で20〜30家くらいいるかな？ちなみに我がランズベルク家は一応3つの惑星を持っているが人口が少なく、何となくBランクなんだけど、先出の通り、レアメタルだレアアースだのがわんさか出てくるのでその総資産規模はAランクの上位に匹敵するのである！ああ、楽しいなスーパー金持ちって・・・

そんな超恵まれたアルフォンス フォン ランズベルクだが更なる転機がやってきた。それは、真夏の祭典、ノイエサンスーシで行われるノイエ耐久48時間レースである・・・

第二話：王宮杯争奪耐久レース

第二話：王宮杯争奪耐久レース（ノイエ・エンデューロ・グランプリ）

帝都オーディンには正直、そんなに行った事はないのだ。幼年学校初等科なのでそもそも機会が無かった。これが中等科ともなれば卒業体験実習という名目でオーディンへ、そしてノイエサンスーシにも行けるわけだけど・・・

今回は王宮杯争奪48時間耐久レースに参加するためにまだまだ灼熱の日差しを照りつける帝都オーディンにきたわけだ。最初はなんのこっちゃ？と思ってエントリー用紙なんかシユレッダーにいれようと思ったけど・・・まてよ！参加予定リストに聞いたことのある名前がぎっしりジャマイカ！原作に登場するやつだけでも、金髪、赤毛コンビとアルトリンゲン、ブラウヒッチ、ファールンハイト、ビットンフェルト、バイエルライン・・・ライナー・ブルームハルト！・・・ブルームハルトって同盟軍のあの【薔薇の騎士連隊】ローゼンリッターにいるんじゃないの？（未だ亡命前のようだ）うーん、この辺りの連中とは繋がりを持っていたほうがよさそうだ・・・

ルールは単純明快、48時間の中で生き残っていれば良いわけである。マシンはワルキューレを使用する。高度3000メートルでリミッターを効かせて空中パイロンをひたすらグルグル回るだけである。ただしワルキューレである以上、爆発しない程度にスペックダウンさせたレーザー、貫通力の弱い実体弾の使用は最低限の範囲で許されているのだ。攻撃ができてしまうのがこのレースのポイントというか醍醐味というかエキサイティングなところである。エンジンも1200馬力にリミットされていて非常に遅い！しかし上記

ルールを守ればチューニングはOKなのである。

パイロットは1チーム3人まで。怪我や具合が悪くなくても残った人数で戦うサバイバルマッチである。今回の俺のパイロット仲間
はグレッグ・ドレイリングとザビエル・マクダニエル・・・何だか
濁点が多い名前な奴らだ。グレッグは白人の北欧系種族でザビエル
はバリバリの黒人である。ともに自信たっぷりで年下の俺に向かっ
て偉そうに話しかけてくるね。「びびってんじゃねえのか」とか「
俺たちの足を引っ張るんじゃねえ」とかお前レースが終わったら
皆殺しだからな！

発進順位を決める予選がもうじき始まる・・・俺は載らずに見て
るだけである。予選にはグレッグがチャレンジするらしい。まあ、
どうでも良いよ、おぼっちま君達さ・・・参加機数を見てたまげた
！480機！完走率は6%ないらしい・・・30機も残らないの！
！なかなかおぼっちま達にしてはエグい競技ですこと・・・金髪赤
毛チームは予選はキルヒアイスか！何か速そうだな。

我々のワルキューレはエンジンがアーマーライン社のメタルライン
Ver.7である。もともと中高速域重視モデルであるところになら
に最高速の伸びを捨てて加速を限界まで引っ張ったドッグファイ
ト用にチューンしている。はっきり言って空中戦使用である。俺は
今回、優勝を狙っている。そうすれば空戦能力を買われて飛び級で
士官学校にいける可能性があるからだ。この後の歴史が史実通りで
あるなら、ラインハルトとキルヒアイスにアドバンテージを持って
いて先回りしたほうが良さそうなので、一気に駆け抜けてやろうと
考えているわけだ。

予選の結果は散々だった、他の機体に何度もヒットしてしまい、
ペナルティ（ヒットする度にペナルティポイントが加算され、順位

が交代してしまう)で何と215番目という超ど真ん中でやんの！
こういうレースの基本は自分の前に成るべく他人を並ばせないこと
である・・・これではスタート時の渋滞や多重クラッシュがあった
ときには逃げられない！グレッグはそれでも強がっていたが「お前
じゃもつと順位が下がっている」とか「思ったよりも今回はレベル
が高い」とかどうでもいいことばかり喋りやがって。ただ、時折見
せる鋭い加速は、こっちの狙い通りだから、明日は俺のパートでせ
いぜい目だつてやるさ。お前こそ俺の足を引っ張るなよ！ってん
だ！

当日のノイエサンスーシの天気は曇り、時折雨らしい。OKだ！
雨になれば視界が遮られる分、全ての機体が同じ条件になるからで
ある。まともにレースすれば、空力もパワーもエリート貴族が良い
に決まってるんだから、しかも絶対あいつら違法チューンしてるよ、
エンジン音が違いすぎる。エンジン内部のマッスルシリンダーの音
が異様に低い、恐らく我々のような同時爆発エンジンではなく異層
爆発タイプのものだらう。低速から高速までの加速とトップスピー
ドに乗っかる時間が理論上は大幅に短縮できると言われている。2
0世紀後半のモータースポーツでは当たり前なんですけど・・・と勝
手に思っているのである。

スタートは地面でエンジンストップ状態でパイロットがダッシュ
してコクピットに飛び込んでイグニッションスタートとなるわけだ。
・耐久レースの血はこんなところにも受け継がれているのか・・・
最初のパートはザビエル・マクダニエルが担当し、予定では3時間
半飛び回って来る予定だ。頼むぜザビアー！

「オン・ユア・マーク！」位置について！ってこと。

「セット、レディー！」

バァーン！

とスタートの号砲がなり、ノイエ耐久48時間がスタートした。パイロットスーツがうじゃうじゃいるからどこがどうなっているのか判らない！一斉にイグニッションから急上昇するワルキューレの群れは壮観な眺めである。一周してこないと順位表示はされない。待つしかない・・・凡そ一周は6分台で帰ってくると予想している。恐らくラストの2時間からはスプリント状態である。5分後半に入ってくると思われる。・・・そんな事を考えているうちに先頭集団が1周目のカウンターを刻みに来た！速い！信じられない6分08秒だつて・・・いきなりスプリント状態かよ！

じりじり、イライラ、何なんだ、オイ！6分50秒、52秒・・・7分！未だ来ない！ザビアーは何やってるんだよ！来た！7分5秒、6秒、7秒、8秒！7分8秒！でカウント！しかも「あれ、後部のアンダーパネルが割れてなかった？」「そっトラフィックういえば挙動がへんだつたね」って、すぐに気づけよ！恐らく渋滞が事故で負ったアクシデントか、早くも撃たれたか・・・その後は7分前半から6分後半の時間で推移していた。ファーストチェンジまで後1時間40分！その周は7分経つても戻ってこない・・・8分！しかもピット内は緊急ピットインを示す赤ランプが点灯している！どうした！俺とグレッグはピットレーンに出ていってその状態を見た・・・

撃たれていた。コクピット周りは出火した後であろう、真っ黒に焦げていた。序盤からコンバットシューティングかよ！面白え！次はグレッグのパートだが、黒焦げのハッチを見てびびりやがったので急遽俺がスクランブルだ！ザビエル・マクダニエルは軽傷だが片目を負傷してしまったのでいきなりチームランズベルクはパイロット2名でその残りのパートを消化する羽目になってしまった。

コースに出た俺はまもなく前方で銃撃をしている集団を発見した。こいつらか？リーダーは誰だ？仕方ないから雑魚を2〜3匹始末し

ちやえ。貫通力を抑えたA-18オートギャトリングガンが測的を始めた。さて、最初は君か！それ！ブブーという鈍い発射音とともに空薬莖数十個がはじけ飛ぶ！最後尾のワルキューレがのた打ち回ってコース外へスピンして行った。

「あららー、衝撃を受けて操縦桿をいきなり切ったらだめなのよ。時速800キロだよ？」俺は正直（チヨロいもんだな、楽勝だ）と口笛でも吹きたい気分だった。一方、僚機を失った一団は動揺していた。その集団は、前方の1機を狙っているのだ。シリアルコードD-02・・・参加者一覽で検索してみる・・・なんとそれはジークフリード・キルヒアイス機だった。ということはその前方の機体はラインハルト機か！

健気な話であるご主人を助けるためにスピードを遅らせブロックしている。きつとコックピット内では「ラインハルト様、お逃げください」とか「アンネローゼ様、ジークは約束を守りました」とか叫んでるのかな？（笑）・・・助けてみるか・・・どうなるのかな人間関係は。ここで見殺しにしても、助けても失うものはないのである。逆に金髪&赤毛コンビに貸しを作れるし！そうと決まれば次のターゲットを探してつと、リーダー格の機体がスピードを下げて近づいてきた。・・・見た顔だ・・・あれは!？

「フレージェルかよ！」何とリーダー格として金髪&赤毛コンビを狙っていたのはあのフレージェルだった。むかつく奴だった。馬鹿兄のアルフレッドと良くつるんでいるが、話を聞く限り一方的に馬鹿にされているだけのような感じであった。正直馬鹿さではどっこいでしょ？しかも6対1でキルヒアイス機をコースアウトさせられないなんて・・・ぷぷっ！虐めちゃうか！その前に手前のふらふら動揺しているワルキューレを軽く一掃射でコースアウトさせておく。直接通信（お肌のふれあい通信）でフレージェルが話しかけてきた。

「この！ランズベルクの馬鹿兄弟の弟か！お前！わかっているのか！」「ハイ？ナンノコトデスカ？」すつとぼけてみた・・・く！貴様の今打ち倒した機体はあのブラウンシュバイク公の6男のヤストルフレッド様だぞ！」・・・。。。。。。げげげ！俺はブラウンシュバイク野郎の一族を撃墜してしまったのか！！うーん、家に帰れなくなるかもしれん。だが、ランズベルクの馬鹿兄弟は許せないね。お前ら全殺し決定ね。

さらに「兄の様に無能でおとなしく仕えていれば良いものを、命知らずが！」さすがに馬鹿兄でも同じくらいに無能で馬鹿なお前に言われることもないだろうが？「その大貴族の御曹司どもが、何を集団でいじめているのだ？情けないの極みなので貴族として見逃せなくてね。」と反論したが「貴様、殺してやる」と同時にフレールゲル機が体当たりをかけて来た。エンジン音からして異層爆エンジンだ。だが反射神経に差がありすぎて、反転して背後に衝いた。「バハハハ！イ！」とギャトリングが火を噴いた。空薬莖が後ろに吹き飛んだ。まあ、機体に当たっても貫通はしないのだから、気にしない。

フラフラとした途端にスピニアウトし始めてコース外へ消えていった。あーすつきりした。残りの機体はスピードダウンして集団としては機能しなくなっている。キルヒアイス機の後ろの俺の機体よりもさらに後ろに下がってしまった。ほとんど見えなくなってきた。キルヒアイス機を見るとエンジンが双発式のモデルだ。つまり我々のアーマーライン社のモデルではなく現行型のオムニインダストリー社製である。2つのうちの一つのエンジンが上手く点火出来ていないようだ。^{デトネーション}失火が。直接通信（お肌のふれあい通信）でキルヒアイスが「アルフォンス殿、かたじけない！」「そつちこそ、後ろから見ると失火してますよ」「最悪はエンジンブローだ」恐らくこのラップをスピードダウンさせてピットに入って修理だろう。さもない

くばリタイヤしてしまつから・・・「ラインハルト殿の機体はスピードを上げていたのでしばらく護衛しましょうか?」「お願いできませんか!」「仕方ないでしょう。忠実なるキルヒアイス殿が修理に入られるのだから」

二人の仲に割つて入るつもりはさらさら無い。ただ、2重にメリツトがある。一つはキルヒアイスとの親交だ。もう一つはラインハルトの心理状況である。キルヒアイスはいない。代わりにアルフォンズというわけだが、キルヒアイスと俺の人間関係が気にならないはずが無い。今、どうこうというわけではない。近い将来に何か使えるのではないかということである。そんなこんなで俺のピットストップの時間が近づいてきた。順位は30番位上げたかな?先は長いし・・・キルヒアイス救出シーンはメガビジョンでオーデイン中に放映されているわけで、他の将来ラインハルトに従う人材連中はどう思っているのか。中々興味深い。

ほぼ3時間半周回したが何人かを救出したわけであり、戦果もも上々かと・・・ライナー・ブルームハルトを救い、同年年のステツチ・フォン・ネイムハルツ(ハードエンジンアおたく)も救った。気がつけばA-18オートギャトリングガンも弾切れだし、丁度良いか!中盤戦に向けて少し休養をとるのもいいかもしれないので・・・おつとオートピットレーンの表示が出てきたので減速しながらピットエリアに進入した。手が、いつの間にか握力がなくなつており、ガクガク・ブルブル状態だったことに気がつく・・・(おいおい、俺も冷静じゃないね)

ブシュー!気圧調整もかねたハツチを開くとドレイリングが「凄いな!38機抜きだぜ!」と言つてきた。俺ははつきり言つておくべきだと思い「正直、俺は優勝したい。だが、あなた達が足手まといなんだ。頼むから俺の足を引っ張らないでくれないか」いきなり反

撃を食らって絶句したドレイリングは、「わ、わかったよ。噂のスーパーボーイは本当らしい。何とか順位をキープして交代できるよ
うにするからさ」最初から話しておくべきだったか・・・ちよつと後悔した。最初の5時間でリタイアした機数が42機！いいねえ、サバイバルジャマイカ！

次のドレイリングが3時間引つ張って3機抜き現在の189位！大丈夫！後半戦はひたすら銃撃戦らしいので、一気に挽回も可能だ！おれが更に3時間半引つ張って19機抜きだった・・・ちよつとエンジンデトネーションの失火が気になったが・・・いけるところまでいくしかない！既に自分でも何機撃つたかなんて覚えていない。周回のペースも6分40秒台である。これでラストがスプリント状態になるのか・・・ちよつとやばいかもしれない。しかしザビエル・マクダニエルは早々に会場から居なくなってしまうし。無責任な野郎だ。

何だろう・・・何か忘れてるんだよね。ラインハルトの護衛は最初のフェイズ以降はキルヒアイスが復活したし・・・凄い重要なことかもしれない事を忘れてしまっている・・・何だっけか・・・中盤戦以降に重大な事件を引き起こすかもしれない事を忘れてしまっている・・・この時はあまりに疲れていて、忘れていたのである。最初のフェイズでコースアウトした馬鹿フレージャーの事を・・・後に怒りと後悔で冷静で居られなくなるというのに・・・

第三話：王宮杯争奪耐久レース【Final】

第三話：王宮杯争奪耐久レース【Final】

王宮杯争奪耐久レース（ノイエ・エンデューロ・グランプリ）も中盤を越えて現在33時間が経過している。俺の順位は66位まで来た。400機以上いたスタートだがラップを刻んでいるのは180機程である。メカニカルトラブルでリタイアしているワルキューレが殆どだが、銃撃戦の末に墜落している機も未確認だが100機近くいるはずである。そもそも俺は30機以上リタイアさせているのだから・・・

途中で4機のワルキューレが多重クラッシュした関係で30分中断。ピット待機のシーンがあった。もちろん俺達はそんな時間も体力回復のために眠っていた。瞼を閉じた瞬間グーです。現在トップはあの！ゾンバルト機である。史実に違わぬKYな操縦で周りのワルキューレを何機もリタイアに追い込んでいるのだ。本人はおそらく気が付いていないし、悪気もないのであるから始末に悪い。上位にはミッターマイヤー、キルヒアイス、などが残っている。やはり予想通り異層爆エンジン組は早い、すでに周回遅れにされてしまっている・・・そして！待ってました！

天候が荒れてきた。やったぜ！雨が風が！これで勝てるぜ。条件はいつしよだ！残りは12時間だまだまだいける！一気に差を詰めてやるぜ！ただ、こっちのワルキューレはたまに失火デトネーションが起きるのが心配である。心配だけど、心配したってトップにはなれないから、フルスロットルだぜ！

強い突風で機体のバランスを崩すパイロットが多い。当然スピードダウンしなければ最悪は衝突かコースアウトだ。トップグループは

ここでギャンブルなどしない。

わかってるからチャンスなのだ。今後のチーム戦略をシヨートチームに切り替えることにした。銃撃戦に関わらず、2時間くらいでグレッジと交代を繰り返していくことにする。その2時間はトップチームのタイム以上で周回しなければならぬので、死ぬほどの集中を求められる。面白え！望むところだ！

限られる視野と突風に対処しなければならぬので、銃撃戦が殆ど起こっていない状態のままレースは続いた。ラップ表示にシリアルコードG 14リタイアと出ている・・・ラインハルト機かよ！ああ、全てのイベントで勝利するわけではないんだな。であれば、少なくともこの勝負、勝ちにいくしかないでしょ！こっちも必死。衝突しないように、それでスピードアップで進む・・・気が狂いそうな作業だった。渋滞に捕まると最悪で衝突回避システムの警告音と強制離脱操作を受け入れながらのコントロールは限界を試されているようなものであった。

ミッターマイヤーチームのメンバーのロイエンタールがメガスクリーンを見上げて盟友の飛行を見ながら「先ほどから異常なスピードでランクアップしている奴がいる」「ただの無謀か、それともこれを狙っていたのか・・・」「面白い、ミッターマイヤーとの勝負も時間の問題だ。しっかり見させてもらおうとするか」「シリアルコード・・・ランズベルク家が・・・アルフォンスなのか、あれは・・・興味深そうに注視しているのであった、そしてもう一人。「キルヒアイスに追いつこうとしている者がいる。」「あのアルフォンスなのか・・・」「何故急ぐ・・・」「俺と同じ事を考えているとでもいうのか、ただのスピード狂が目立ちたがりの仕業か」「もう少し見ていくしかないだろう」

バンバンバン！キャノピー周辺が銃撃を受けた！」「一瞬バランスを崩したが何とか持ちこたえた・・・誰だ！・・・雨でシリアルコードが読めない！スピードダウンで並んでわかった。あれは！バイエルライン機である！」「仕方ないな、バトルだぜ！」「ドッグファイト開始である。エンジン音と加速スピードから異層爆エンジンではなさそうだ・・・ならばストリートファイトで慣らした間で勝負してやる。何しろこのワルキューレは3000メートル以上上昇できないわけだから。後ろを取られたらほぼ終わりである。まずは！急加速！ドン！と加速Gが俺をシートに押し付ける。加速重視の中でさらに最高速度域を思い切り捨ててローギヤード仕様にしてあるのだ。一気にバイエルラインを引き離す。

しかし高速域の伸びは当然バイエルラインの方が上であり、徐々に追いついてきたロックオンセンサーの音がピーピー当てられて聞こえる。「おいでーおいでー」射程ギリギリまで粘るつもりだ。ブーブーン！と左脇を機銃掃射音がすり抜ける。「甘い！未だ遠いだろ！」右に左に操縦桿を振り回して避ける。何だか他の関係ない機体に当たったかもしれないが知ったことではない。バイエルラインもきつと俺だけ追い続けているのだから・・・現在順位は51位である・・・

ようやくバイエルラインの機体も加速域に入ってきたようだ。さあ、勝負だ！ロックオンセンサーがピーと長い音をたてるようになった。いよいよ射程距離内に捕まった。でも・・・まだまだ、もう少し引き付けないと。俺の機体のオートギャトリングガンが2門あるうちの1門が故障してしまっているので、こっちも迂闊に攻撃できない状態である。おまけにレーザーは最初のザビエル・マクダニエル先輩が銃撃を受けて壊して帰ってきたので使えない。

今だ！ガチャガチャ！と操縦桿とスロットルレバーを押し倒して、

急減速！すれすれの横をバイエルライン機がすり抜ける！もらったね！再びフル加速に入って逆に此方がロックオンセンサーを起動した。戦争ではない。レースだから少しのダメージでいいのである。俺は迷わずオートギャトリングガンを撃ったブオオオオオオーン！数十発の銃弾がバイエルライン機に命中した。堪らずスピンを起こした。その上を俺は通過した。このレースで合うことは無いでしょ？と思いつながら先を急ぐ・・・しかし！恐らくフルブーストを駆けてきたのだろう。後方監視システムがバイエルライン機の接近を教える。

マジか！再びロックオンセンサーが音を立て始めた・・・その瞬間！・・・ボツ・・・ボウウウウウンとバイエルライン機は派手な白煙を上げてみるみるスピードダウンをしていった。残念、エンジンブローである。悔しがつてるだろうな。でも勝負は勝負！メガスクリーンを見ている観衆もバイエルライン機の派手なエンジンブローで大歓声だ。ここで俺もピットインサインが出た。バトルにかまけ過ぎて順位がそれほど上げられなかったには残念だ。現在48位でピットイン。頼みますよグレッグ先輩！俺は残り9時間で交代した。

ぐっすり眠ってしまった。俺はピットクルーの同僚に起こされた・・・え、もう出番なの・・・腕のG-SHOOKを見ると交代してから未だ1時間くらいだ・・・「え、何かあったの」・・・頭が朦朧としていて何だかよくわかっていない。ピットクルーから「グレッグが順位を下けている。今55位だ」という報告だった・・・うーん・・・！「何だつて！」グレッグの野郎！ふざけやがって！急いで支度をして緊急ピットインを支持して戻ってこさせた。今後の残り時間を2時間の俺が3回グレッグが1時間の2回という一口ーテーションで行うことにした。既に今回の交代で規定交代数はクリアしたので後は好きな様にいじれるのである。

急上昇してみた思った。グレッグが抜かれたのは腕やモチベーションではなく、機体がパワーダウンし始めていたことが原因のようである。今のところ風は収まり雨は強いが安定性は確保できる。そういうコースコンディションだから・・・銃撃戦である。残り8時間でラップを刻んでいる機体は何と96機である。A-18オートギヤトリングガンは1門しか使えないので、あまり長い連射は出来ない。最後になって丸腰ではこっちも不安だからだ。失火もデトネーション気になるし・・・それでも、不安な部分はみんな同じじゃねえの？こっからが勝負だよ。で、41位で2時間のノルマを達成してまたグレッグと交代した。

グレッグの1時間はがんばってくれたようで42位(それでもランクダウンじゃなか！頼みますよ先輩！)交代してみるとまたまたパワーダウンしてる！きつと1気筒死んでるなこのエンジン・・・いよいよ残り時間は5時間となり、無線でフリードリヒ皇帝陛下がこの会場に表彰式のために向かいだしたとの話があった。大詰めだ、負けてられない！この2時間で10機抜きをしないと間に合わないかもしれない。エンジン、持ってくれよ！雨は止むなよ！おっと、後方監視システムが警報だ！・・・キルヒアイス機か！まずい！今撃たれるとコースアウトしてしまう！うーん・・・

撃つてこない。操縦スキルで勝負するのか？もしやそっちだって武器系ウェポン・コントロールにダメージを負っているのかい？上等だ！決着を付けよう。カモン！ラップタイムが6分20秒台に上がっている！雨が激しいのにこのタイムはまずい・・・晴れたら5分40秒台か・・・そしてたら勝てないな。なんとかこの高速タイムを維持しながら周回しないと！キルヒアイスは後ろにぴったり付いて来ており、まさにテールトゥノーズ状態である。俺のスプリントに周りが付いて来れないのでこの状態で5〜6機抜いている。

抜かれ際に無理やり銃撃してくる機体もあつたが、狙つてないので殆どあたらない。目の前にはうつすらと渋滞が^{トラフィック}・・・邪魔だな。相對速度であれが遙かに上なのに・・・そつと抜く去る手は無いのか？そつと、ポジションランプを消すか、後ろのキルヒアイスはずつと張り付いたままなので追い越す直前でポジションランプを消してやるか！前方の渋滞でどうやら接触があつたようだ、火花に続きボン！という音が聞こえて赤い火が一瞬見えた。四散して吹き飛んでくる破片を避ける動作に入った！来た！残骸だ！危ない！急上昇で間一髪すれすれ回避できた・・・ということは後ろのキルヒアイスは、ヒットしてしまった。ガンガン！という音がして直撃ではないが胴体にダメージを負つてしまったようだ。あつという間に後退した。

メインスタンド前にあるラップスクリーンを見ると・・・30位である！1位は未だゾンバルトであり、ミッターマイヤー機が8位につけている。俺のターンが終盤になったので銃撃戦に切り替えた。ここでグレッグに変わる前に1機でも減らしてやる！ドッグファイトで3機をコースアウトにした。ここでピットインサインを確認しグレッグのラストパートが始まるのだ。

グレッグのラスト1時間は何と！4機も抜いてきた（その内の2機はメカニカルトラブルであるが・・・）それでも現在22位でラップしている！ラップしている総数は62機！減つたねえ！さあ、いよいよファイナルターンのラスト2時間だ！勝負だ！交代する際に「先輩、やるじゃないすか！」といったら、「まあ、本気でやればあのくらいはね！」だつたら最初から本気出せや！

弾丸は満載しエンジンも何とか動いている！OK！いくぜい！他の機体も交代のタイミングだったのか急加速、急上昇で19位になっ

ていた！さつさと銃撃戦で前に出て弾丸を空にして軽量化して最後の勝負を仕掛けるつもりであった。ところが・・・前方の渋滞トラフィックで何が起きているようだ！立て続けに煙を吐いて5〜6機のワルキューレがコースアウトしていったのである。メガスクリーン前の大観衆も大きくどよめいた！・・・！？・・・最後尾から銃撃している奴がいる！シリアルコード・・・何！あいつは馬鹿フレージェルじゃねえか！リタイアしたんじゃないのか？

フレージェルの機体から撃ちだされる銃弾がやけにダメージを負わせている・・・まさか、ルール違反の実弾じゃねえだろうな！フレージェル機に撃ちだす銃弾は間違いなくコンバット仕様の実弾であった。当然ルール違反であるが本人はどうやらお構いなしで打ちまくっているみたいだ。無線で「あのランズベルク家の次男」「馬鹿アルフオンスはどこだ！」と叫んでいる。こいつクレイジーだ！とりあえず先頭にいるのがミッターマイヤー機であることを確認できたので馬鹿フレージェルを撃墜してやることにした。そーっと後ろに近づいてと・・・ロックオンセンサーも使わないで、ポジションランプも切ってこっそり、こっそり、ぴったり背後をとってから無線で「よう、馬鹿フレージェル！」「生きていらしたか」と、同時にロックオンセンサーと銃撃を始めたブオオオオオオオ！とかなりの連射を行った。

たちまちコントロールを失ってスピンを始めたフレージェル機だったが、俺がぶち抜いた後から物凄い勢いで追いついてきた。あの急加速はありえないでしょ？もしかしたら違法エンジン？ミッターマイヤー機と並んで飛行していたので無線で「あの加速は尋常じゃないまるで疾風だな」って話してたけど・・・疾風は後であなたが付ける冠だから取つといたほうが良いのでは？なんて思ったりして、ちよっとおかしかった。「あれはルール違反の実弾ではないですか？」と話したら「何！やはりそうか、奴に撃たれた機体が爆発していた

のでもしやとも思ったが「俺の現在の位置は5位と8位集団である。もう少しなんだけどなあ・・・」あの、馬鹿フレージェルは俺が目当てらしいので、離れていてくださいね」「いやいや、年下のアルフォンス殿に一人で戦わせたとあれば、ミッターマイヤーの名が廃る」「相手はルール違反の実弾を使っているのですから。助太刀しますよ」と言ってくれた・・・うーん頼もしい！

無線で馬鹿フレージェルが「貴様、アルフォンス、この悪天候のどさくさで殺してやるぞ!」と恨み声を発していた。こっちはこんなところでこんな無能野郎と遊んでいる暇はないので、「どうぞ!勝手になさってください!」「気が散るんで無線使わないで下さいね!」とガツン!と話しておいた!一瞬フレージェル機が怒りの青白い炎に包まれている気がしたが・・・いきなり撃ちまくってきた!ロックオンセンサーも何もあつたもんじやない!とにかくぶっ放してるって感じだね。ただし実弾だから当たると厄介なんだな。俺とミッターマイヤー機は交互に前後を左右を振りながら移動していて狙いを定まらせない!

基本俺しか見てない訳だから、スルスルとミッターマイヤー機はスピードを下げたフレージェル機の後ろに回り込もうとしている。流石だ!疾風ウォルフ!任せたぜ!何でもかんでも撃ちまくってるから他の機体に当てやがって、2機墜落してしまった・・・まあ、抜く手間が省けたけどね。ガンガン!やばい!俺の機体にも被弾してしまった。自動消火装置!・・・そうだ!いいぞ!損傷軽微!フレージェル機の後ろに気配を消したミッターマイヤー機がぴったり付いていた。「やっぱルール違反はいけないよね」と言いながらプロオオオオオオ!と射撃し、全弾コックピットの風防ガラスに着弾した。俺達の装備している弾丸は貫通しないがガラスにひびを入れることは簡単だった。視界を失ったフレージェル機はスピードダウンするしかなく、あっという間に後方に消えた。

「ありがとうございます！助かりました！」「いえいえ、大した事はしていませんよ。」と言葉を交わし・・・「では、ラストスパートに向けて！」前方の1位と4位集団は目の前だった。48時間耐久レースも残すところ40分である。俺とミッターマイヤー機はトップ集団に追いつき、今や1位と6位集団となった。後方の集団は半周以上つまり2分以上差がついており、優勝者はこの6機の誰かがなるのだろう。俺のワルキューレは現在ギヤトリングガン弾切れ。油圧低下、水温上昇・・・調子はぜんぜん良くない！何とか持てよ！エンジンよ！

1位集団ですつと周回を重ねながら、決定打をみんな出せずにいる。みんなタイミングを計っている。ファイナルブーストのタイミングを・・・俺のエンジンはファイナルを少しチューニングしてある。みんなフルブーストをかけるにはエンジンの状態と相談しながらになるが、平均30秒と40秒くらいのブーストタイムでセッティングしているはずだ。だが俺は20秒。それもMAXでだ。そもそも異層爆エンジン組みにまともなぶつかつても勝てないのでエンジンの短命覚悟でスーパーハードセッティングをしたわけだ。20秒間しか持たないが最高速度は1.6倍くらいにはなる計算だ。エンジンが持てばだが・・・

みんな躊躇しているのは48時間ぶつ通しで飛んできたエンジンだから、耐久性に自信がないのだ。俺はそのほうが助かる。むしろ周りが早めのブーストを駆けられると追いつけなくなると思うので、もつとみんな慎重になれ！

俺は瞬間最大順位は1位にもなっているが異層爆組に最高速度でやられてしまう。悔しいが仕方ない。いよいよ残り時間15分を切った！後、2周か3週だ！踏ん張ってくれ。みんな軽量化を求めるの

でもはや銃撃戦もない。弾丸が残っていないのだろう……。う！失^{デトネ}火だ！……。しかし一瞬だった。いよいよエンジンも終わるのか・
・順位は5位。ミッターマイヤーは3位につけている。

もはや体力も機体の耐久性も限界だ！また、ラップを刻んだ！お、
1機ブーストを駆けた！濃い白煙が吹き出ている！早い！ぐんぐん
離れるぞ！おい！……。と思った瞬間にボン！！と派手な爆発音と
同時にスピードダウンしてしまった……。やっぱりみんな苦しいん
だね。どのみち俺のワルキューレは最後の最後に仕掛けるしかない
のだから。後ろからミッターマイヤー機を見てるが2度ほど失火が^{デトネーション}
起きている。不安はいっしょだろ！って。

さらにラップを刻んだ。タイマーが48時間を越えた！ファイナル
ラップだ！雨は最後まで止まないで振り続けた。俺はこの天候だけか
らここまで出来た。現在4位だ。最後尾の機体はじりじり離れたし
ている！恐らくエンジンが持たないのだろう！ミッターマイヤーは
2位のまま、1位は信じがたいがああ無能のレットルを後に貼られ
るゾンバルトである！今3つ目の空中パイロンをクリア、後は11
キロの直線と第4パイロン……。最終コーナーだ。どうする。みん
な様子を探るために自然と接近してきた。苦しい！もう少しだ！だ
れが来るんだ！おっと！ゾンバルトとミッターマイヤーが同時にブー
ストを駆けた！

ドン！一気に加速し始めた！まずい！このままでは追いつけなくな
る！ゴールまでまだ1分ある！第4空中パイロンクリア！だめだ！
勝負だ！30秒くらいあるが持たせるんだ！勝つんだ！いけ！ワル
キューレ！フルブースト！俺はフルブーストモードのスイッチを押
した……。ドドン！と物凄い加速感と強烈なGがかかって来た。

周りの景色が全く見えないジャイロスコープで辛うじて真っ直ぐ進

んでいることが確認できる時間が長い！まだなのか！持つのか！ミッターマイヤーとゾンバルトが眼の前にいる！ついに追いついた。並んだ！もうすぐだ！次の瞬間！！！！

ポボウオオオオオオオオオオオオウ！

エンジンがブローしてしまった。それでも慣性でゴールインできた！

順位は？激しいスピードダウンでコントロールがし難くなったワルキューレを操りながらラップモニターを見た・・・4位だった・・・

熱く厳しい48時間耐久レースは終わった。

表彰されないので、さっさと手続きを済ませ家に帰るつもりだ。

パルクフェルメの通路の両脇には物凄い数の観客が集まっていた。優勝はゾンバルト！信じられない！2位はミッターマイヤーが3位は・・・同級生のウエイマン・テイスデイルというやつだった・・・ミッターマイヤーのそばにはロイエンタールが付き添っていた。仲がいいなあ！そして冷たい視線を感じた後ろを振り向くと馬鹿フレーゲルがいた「貴様、覚えて置けよ！」と物凄い形相で睨みながら去っていった。こいつははずれぶん殴ることになるんだろうなあと考えながら片づけを手伝っていた。

あーあ、一応飛び級の申請はして見るつもりだ。何しろもう一步だったのだから！価値のある4位である。早く宇宙デビューしたいなあ・・・と思いつながら雨が上がり満天の星を見上げるアルフォンスであった・・・

第四話：初陣！ナイメーヘン遭遇戦！

第四話：初陣！ナイメーヘン遭遇戦

飛び級申請が無事通り、俺は上級士官学校に進級した。稀な飛び級扱いなので周囲の視線も冷たかった。受ける授業も何となく俺に対しては不親切な空気が流れていた。ただ、既に進級していたミッターマイヤーとロイエンタール、ビッテンフェルトらとは非常に親密な関係であれたことが幸いだった。彼らとのつながりの仲でシユタインメッツ、ルッツ、ケンプらとも交流を深めている。

上級士官学校とは・・・まあ、俺のいた時代で言うと大学と専門学校の合体したような感じである。学力の向上は当たり前だが、現在銀河帝国は自由惑星同盟なる叛徒どもと戦争中であるので当然、戦時下における対応能力は要求される。幼年学校では小学校レベルから中学1～2年程度の学習内容であった。上級士官学校では、学部学科はより細かく分けられる。適性や本人の希望が考慮される。

通常は馬鹿貴族どもは砲術科に進んで早くから戦闘艦の艦長や指揮官になりたがる。そりゃあそうだよな、命令したがる・・・というか他人の命令なんか聞いたことが無い奴らだもんね。そりゃ仕方ない。俺はその辺は弁えていると言うか、目的が違うので航空科でワルキューレを極めることにしたのである。この航空科とは上空や宇宙を問わず、高速機動戦についての訓練学習を目的としている。だから大貴族ではない連中はここで腕を磨いたりするわけだ。

逆に砲術科は一般的にあんまり人気が無い。変に大貴族の御曹司のサロン化している・・・でも、そんな座間で大丈夫なんだろうか・・・艦隊を指揮するんだよね？近い将来に・・・だからラインハルト

みたいに一気に駆け抜けられるのだろっけど・・・そこに目をつけたわけでもあるし、王宮耐久レースでドッグファイトの醍醐味にヤラれた部分もあるんだけどね。あとはこの航空科に來ている人材である。後の帝国の双壁や原作上でラインハルトに仕える連中がほとんど揃ってる。つまりここで影響力を・・・いえいえ、リレーションを高めて來るべき時に仲間になつてもらいたいと考えた。

訓練は座学や模擬空戦などが行われ、徐々に実戦に向けての訓練が始まつていく。訓練でくたくたになつてベッドに倒れこんで熟睡しかけたところで緊急出動サイレンだ！再び飛び起きてパイロットスーツに着替えてワルキューレに飛び込む！くたくたになつて戻つて朝食のトレイを持って並んでいると再び「緊急出動！パイロットは2分後に格納庫へ！」のサイレンが鳴り響く・・・もう・・・ぐつたり。

上級士官学校に入学した時点で階級は少尉扱いである。実戦を経験して功績を立てると中尉になる。その後は学生時代で大尉扱いになれるか、実戦配備後になるのか、そんな進み方である。戦闘艦の艦長は原則大尉以上である。実戦に出て経験を積みたくない馬鹿貴族どもは何とか金と政治力で実戦経験無しでまず大尉扱いを獲得してそこから更に艦隊運営責任者として少佐とかに勝手になつていくのである。

そんな俺達が宇宙空間での高速機動戦闘の模擬戦を実施するために、現在訓練艦隊に配備され、艦隊運営とワルキューレと複座式戦略爆撃機ドーンコメットの实戦訓練を行つていた。訓練宙域はイゼルローン要塞から同盟領方面の回廊内で小惑星帯が広く展開しているところである。ワルキューレの宙域内戦闘に限つて言えば、ミノフスキー粒子が辺りに蔓延しているために通信回線は殆ど役には立たない。周囲500メートル位までの緊急衝突回避システムと肉眼での

目視しか生き残る術はないのである。

艦隊の行動ともなれば大出力のエネルギー放射があるので、ミノフスキー粒子干渉下であっても位置の確認は容易である。そんな状況の中俺達はワルキューレで高速機動戦の訓練を行っていた・・・最初のうちは機内にある立体天球儀上での上下位置感覚が掴めないで苦労した。集結のサインを確認してから実は俺だけ逆さまで飛んでいて上官にこっぴどく怒られてしまった。しかし、慣れてしまえば他の仲間には遅れを取らなかった。元々優れた運動神経があるわけで、ドッグファイトもバスケツトボールで言うところの1on1（一対一）なわけだから、むしろ俺が得意とする分野である。

訓練宙域は通称：ナイメーヘン地区と呼ばれている・・・遠すぎた橋か？訓練14度目の出撃が行われた。訓練といっても実弾とミサイルと急降下用の爆装もしている、フルスペック状態で行われるのである。訓練教官はウォルダースという。めちやくちゃやかましいが、実戦経験が豊富なおっさんで我々訓練生の間では「ウォルダースの口撃は10機のスパルタニアンに囲まれるより怖い」と恐れられている存在であった。本人の口癖は「もうじき年齢制限で後方勤務に追いやられる。そんな貴重な時間をお前らのような屑訓練生と共に居なければならぬのは、とても家族に話せるものではないな」である。

小惑星帯を敵の艦隊と見立て、高速戦闘のヒット&ウェイの訓練を行っていたが訓練艦隊の位置がやけに動いている事に気がついた俺は近距離通信（お肌のふれあい通信）で確認した。「ウォルダース上官殿、訓練艦隊がずい分我々の前方まで回りこんでいますが、大丈夫ですか」「あれでは強襲後の離脱時にコースインしてくる艦艇があるかもしれません・・・」「我が上官殿は「ふむ、アルフォンソよ。お前は訓練が足りないようだな、どんな状況下でも一撃離脱

を成功させるのが我々ワルキューレ戦隊の役目だ。」「貴様に命令する、再度ナイメーヘン外周で連続攻撃訓練を開始せよ!」・・・あーあ、言われちまったかあ、めんどくせえな!と操縦桿を切り返した。

急速上昇の後にターゲットをコンマ数秒でロックして一気に急降下する・・・あれ、何だか訓練艦隊の数が増えてやがる。70隻位のはずなのにいつの間にか120隻を越えているのか・・・いつ増えたんだ?さあ!訓練のターゲットは?・・・あれ?急加速しながら何か違和感を感じていた。数が増えていることもそうだが、艦隊の隊形が横一文字隊形である。訓練時にはありえない。何故なら戦闘を意識した隊形ではないのである。やれやれ、暢気なやつらだ。仕方ないからちよつと脅かしてやるか、俺は中央の大型艦に向けて急降下を開始した。その直後機能しない無線機が激しい雑音が起こった。「何だ、また、上官殿か」余計な事をするな!みたいに怒鳴っているんだらう。

艦隊も俺の急降下に気づいたのだらう。慌てて陣形を変えようとふらふらしている。「遅い!」ターゲットロックオン。ロックオンセンサーが激しくピーピー鳴りやがる。艦艇識別確認!コーション・イエロー!・・・え、コーション・イエローのはずねえだろ。イエローは同盟軍艦艇に設定してるのに・・・その瞬間猛烈な対空防御射撃が行われた!「!同盟軍かよ!」急速離脱を行う時に爆装してある対艦爆弾を全弾発射した。物凄いGの後なので命中したかどうかは、戦闘確認カメラが記録しているだらう。離脱後に再度転進して同盟軍艦隊に突っ込んでいったがあまりの対空射撃の激しさに全く近づけない。

「貴様、何をしている!」ようやく、味方を連れて上官殿が戦闘エリアに入ってきた。しかも前方にはスパルタニアンが発進して来て

いる！どつちも遅いや。「上官殿報告します。敵艦隊を発見いたしました。」「わかっておる！見ればわかる！」「全機突撃隊形展開これは実戦である！訓練ではない！」両方の艦隊もお互いを確認しており、艦隊戦の用意をしている。訓練艦隊も訓練とはいえ普通に戦場使用が可能な巡航艦などで編成されているので戦闘は問題ない。運よく俺は仲間のグレッグを確認し、共同でスパルタニアンに対峙した。この実戦でどれだけの仲間が撃墜されるのだろうか・・・

正面にスパルタニアン。俺が引き付けてドッグファイトを仕掛ける瞬間に斜め後方からグレッグが割って入り襲撃して撃墜する。後ろにつけられてもロックオン寸前に大回りした俺、グレッグ、が射撃を行う。前方に集中している敵は一たまりもない。相手に有効射撃を繰り返していたので補給が必要になった。しかしまだ、スパロームミサイルが残っているので、前方で射撃を行っている巡航艦に向けて一撃離脱を行う。至近距離では敵の艦艇に対する警告サイレンが激しく鳴っている。対空砲火を潜り抜けて何とか全弾発射した。離脱時に至近距離で対空ミサイルが爆発し、少しダメージを負ったようだ。

スパルタニアンに対する武器が弾切れになるので急いで戻る道中に散々敵機に追い回された。こっちがダメージと弾切れをわかっているようだ・・・むかつく！制空権掌握率は同盟が65%となってしまう。やはり訓練生では駄目なのだろう。ようやく母艦に戻って補給を受けられる。整備メカニックから「少尉、何だか凄い戦果を挙げられているらしいじゃないですか！」「え、そうなの・・・」「うーん、よくわからん。」「次はワルキューレでいくかドーンコメントでいくか、ちよつと悩むところだが、空戦が続いているので、ワルキューレで再度発進することにした。補給待機時間は10分・・・艦内のフードコートでフルーツジュースとプロテイン錠剤、ハムカツサンドイッチを流し込んだ。

目薬でシャキ！としてヘルメットを被り、コックピットに収まった。メカニックが「ダメージの修理はOKです。」「全開でいきます！御武運を！」と喋って射出カプセルに送り込んでくれた。発進！ドーン！という発射のGが体をシートに思い切り押し付ける！立体天球儀が敵味方の位置を表示する・・・ずい分やられているな。同じく補給の終わったグレッグと同じ分隊所属のステイーブ・ワトソンが合流し3機で中央を突破することにした。途中でギヤトリングガンで2機のスパルタニアンを撃墜した。6門のギヤトリングガンの掃射を受ければひとたまりも無いのである。

高速機動戦域は既に同盟軍が優勢で進んでおり、帝国ワルキューレ戦隊は劣勢であった。目立つならこんな時である事はわかるのでグレッグとワトソンに「目立ちたいので、艦船攻撃に切り替えようと思うが」と話したら、高速機動戦の雌雄は決めているので手柄狙いでいいかも。という返事だったので目標はスパルタニアンではなくて、宇宙母艦である。同盟軍艦隊の間をすり抜けながらインターセプターの追撃を振り切りつつ宇宙母艦を探した。恐らく2〜3隻はいるはずである。勢い余ったインターセプターが仲間の駆逐艦に衝突して駆逐艦も爆沈した・・・あれは俺のスコアになるのだろうか。

敵のスパルタニアンも徐々に母艦に戻り始めた。帝国の訓練生ワルキューレ戦隊も急いで収容されている。後5分もしないうちに艦隊戦になるだろう。急がないとね、グレッグが「いた！4時の方向！宇宙母艦だ」「距離300」いくぞ！グレッグが見つけた宇宙母艦はスパルタニアンがほぼ満載状態の艦であった。一気に補給に戻って来て補給中なのである。チャンスだやるしかない。後方からインターセプターが6機！猛烈な勢いで追いかけてきた。俺の意図を察したのである。「距離100！いくぜ！グレッグ！ワトソン！」

艦底から近づいてスパローを全弾発射。全弾補給中のワルキューレに着弾！上昇し対艦ミサイルと爆弾を艦橋付近に全弾発射！だ！

急上昇と緊急離脱で同盟艦隊の中から離脱しているが怒りのインタセプターが20機くらいで追いかけてくる！結果は確認する暇も無い。2機のインナーセプターを撃墜したが俺のエンジンの装甲版も打ち抜かれ、じきにパワーダウンするかもしれない。グレッグはもはや弾切れらしく、必死で逃がっている。もうちょいで帝国艦隊干渉宙域なんだ！逃げる！そのときギャトリングガンの一斉射撃が始まった。ウォルダース殿が訓練生を率いて救出に来てくれたのだ。「命令違反だぞ。アルフォンス、グレッグ、ワトソン」「私は今回の訓練で対艦戦闘を行えとは言っていない。」「うるせえなあ・・・こっちは必死なのにさ。援軍を見てインターセプターが引き上げていった。何とか助かった。

巡航艦2隻、宇宙母艦1隻、駆逐艦1隻、スパルタニアン9機・・・これが俺の戦果らしい。すべてはカメラのデータを照合した結果である。一躍スターダムに踊りだせた。訓練生でこれだけの戦果を挙げたのは銀河帝国以来初かも知れないと・・・帝国全土の高速通信で一躍ニュース扱いである。俺は2年を残して大尉に昇進。いつでも実戦部隊に配属希望が出せる。しかも艦長か空戦隊長格を選べるのである。俺はただの艦長には興味が無く、むしろもう一段結果を出して少佐に昇格後に分艦隊の指令として進んでいく事を考えているので、今回は空戦隊長を選択した。

数年後銀河帝国の政治・軍事の頂点を極める事になる俺の記念すべき初陣はこのような形で幕を閉じた。俺の愛機ワルキューレは性能を3倍にアップさせるチューニングを施し、機体もミッドナイトブルーに染めて、違いを出した。これが後に同盟軍パイロットの中で、青き流星として恐れられる事になるはじまりである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0169y/>

銀河迷雄伝説

2011年11月9日12時17分発行